#### 法政大学学術機関リポジトリ

#### HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

#### 研究展望(平成15年)

高橋, 悠介 / 山中, 玲子 / 表, きよし / 伊海, 孝充 / 宮本, 圭造 / 橋本, 朝生 / 竹内, 晶子

(出版者 / Publisher)

The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University / 法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究: 能楽研究所紀要 / NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies

(巻 / Volume)

31

(開始ページ / Start Page)

107

(終了ページ / End Page)

130

(発行年 / Year)

2007-07-31

(URL)

https://doi.org/10.15002/00007496

# 研究 展望 (平成十五年)

28号(平成12年単行本と平成14年分)、30号(平成12・13年28号(平成12年単行本と平成14年分)、30号(平成12・13年28号(平成12年単行本と平成14年分)、30号(平成12・13年28号(平成12年単行本と平成15年に発表された能・狂言関係の分)に続き、今号では平成15年に発表された論文を概観する。相変わらず「展望」というには遅きに過ぎ、またこの年に発表された形大な数の研究すべてに触れることもできないが、論文・た厖大な数の研究すべてに触れることもできないが、論文・た厖大な数の研究すべてに触れることもできないが、論文・た厖大な数の研究すべてに触れることもできないが、論文・た厖大な数が多くなく、特に演出研究(宮本圭造)、外国語による能楽論研究(竹内晶子)の七つに分け、分担執筆している。演出・話研究(竹内晶子)の七つに分け、分担執筆している。演出・話研究(竹内晶子)の七つに分け、分担執筆している。演出・話研究(竹内晶子)の七つに分け、分担執筆している。演出・経済の研究がある。

単行本

44・44・49頁。1・5・12月。八木書店。各一二〇〇〇円)『梅若実日記』五・六・七(梅若実日記刊行会編。A5判

店。七〇〇円)『能楽への招待』(梅若猶彦著。新書判90頁。1月。岩波書

重視が強調されるなど独特の入門書となっている。岩波新書舞台・能面などの一般的な説明もあるが、役者の「内面」の観世流シテ方で大学の教壇にも立つ著者による入門書。能

楽之友社。四八〇〇円)

能の囃子と演出』(高桑いづみ著。A5判惣頁。

2 月。

音

ぐっての考察。世阿弥・禅鳳伝書や雅楽伝書などに基づく世 歴史的な変遷を丁寧に解明している。 書の検討や困難な復元作業に基づく考察であり、 笛」「乱声」「渡り拍子」をめぐる論が展開される。 考察がなされており、「第四章 登場楽の古態」では 平岩流の特徴が明らかにされている。「第三章 阿弥時代の能管の様子や、 がら考察する。「第二章 変化の様子を、 演出」では「ハヤフシ」「扇拍子」「オロシ」に関する詳細な ける囃子の役割を笛と小鼓・大鼓に分けて説明する。「第一 した書。冒頭の「序にかえて「囃子のはたらき」では能にお 著者が取り組んできた能の囃子に関する研究の成果を集成 鼓胴の形態変化」では雅楽鼓胴から能楽鼓胴への形態の 中間的形態を持つ鼓胴の調査結果を踏まえな 一節切と能管の楽曲交流の実態、 能管の奏でた音楽」は能管をめ 謡と舞の古 能の囃子の 様々な伝 早

33頁。2月。世界思想社。八五〇〇円 能・狂言の生成と展開に関する研究』(林和利著。 A 5 判

記録を丹念に調べ上げてまとめた、 り・棒縛〉の考察のほか、幸田露伴・谷崎潤一郎・芥川龍之 と狂言脈という二つの流れについて、芸能における 介などの作家と能との関わりが取り上げられている。「第二 第一章 作品研究」では能〈檜垣・鳥追舟〉や狂言〈末広か 歴史研究」は著者が鹿児島女子大学勤務時代に薩摩藩の 系譜論・本質論」では、伝統演劇における舞踊脈 狂言の滑稽性と美学をめぐる論が展開される。 中世末から幕末・維新ま 「踏む」

> きた著者の成果がまとめられており、付録の資料も役に立つ。 心としている。幅広い視野から能・狂言の研究に取り組んで 究」は名古屋女子大学に移ってからの名古屋の能の研究を中 での薩摩における能の考察である。「第三章 『能楽囃子方五十年 亀井忠雄聞き書き』 (亀井忠雄著、 資料

ベ十二時間にわたる対談の中で、五十年に及ぶ活動を振り返 葛野流大鼓方の亀井忠雄が、土屋恵一 三八〇〇円) 郎・山中玲子との延

屋恵一郎・山中玲子聞き手。A5判10頁。3月。岩波書店。

の用語などが説明されているのが親切である。 開の中に演奏への細やかな心遣いがうかがえる。 能のために」の五章に分かれており、きびきびとした話の展 ける・観世寿夫について・大鼓から見た作品論・これからの りながら能への思いを語る。「修業時代・能の世界を打ち分 脚注で囃子

白竜社。一八〇〇〇円 『謡曲紀行 一・二』(小倉正久著。A5判邸・ 498 頁。 5月。

連載したものに整理加筆して二冊にまとめている。 梗概と、物語や背景など著者が関心を抱いた事柄が記され いる。著者は医師で、千葉県我孫子市医師会会報に十三年間 |翁||と宝生流現行曲||八〇番について、 曲の 舞台、 曲

ながら綴った随筆集。 観世流シテ方である著者が五十年の舞台生活をふりかえり 社。二〇〇〇円) 『まことの花』(梅若六郎著。A5判32頁。7月。 全体が四編に分かれており、 世界文化

Iでは修

は影響を受けた人々についての話が展開されている。 対する考え、Ⅲは役者としての活動を通じて感じたこと、 業時代の思い出、 Ⅱでは能舞台や能面など能の様々な要素に

IV

作・野村万作の考えが記される「狂言三人三様」、渡邊守 斎独言」、〈萩大名・靱猿〉など八曲について萬斎・茂山千 章・いとうせいこうらが萬斎への思いを綴る「野村萬斎の世 蜷川幸雄の巻頭言、山口宏子・土屋恵一郎が聞き手の 編。四六判28頁。8月。岩波書店。三〇〇〇円 |狂言 三人三様 野村萬斎の巻』 (野村萬斎・土屋恵 一萬 郎

界」から成る。 勉誠出版。一八〇〇円 『世阿弥 人と文学』(石黒吉次郎著。 四六判24頁。 8月。

観し、後半で世阿弥作の能を概観するとともに〈高砂・実盛〉 観する。「世阿弥の作品」では前半で世阿弥の能楽伝書を概 の世阿弥伝書の記事を随所に引用しながら世阿弥の生涯を通 く分けられており、「世阿弥の生涯」では『風姿花伝』など など五曲を具体的に紹介している。「日本の作家⑽人」 シ 全体が「世阿弥の生涯」と「世阿弥の作品」の二つに大き ・ズの一冊。

二六〇〇円 黒川能と興行』 (桜井昭男著。 B6判22頁。 9 月。 同成社。

事柄を説明した後、「 追究する。「序章 江戸時代における黒川能の様子を「興行」という観点から 黒川能の里」で黒川能に関する基本的な 「第一章 黒川能と庄内藩酒井家」では

> どが明らかに伝わってくる。同成社江戸時代史叢書17 ら明らかにし、「終章 黒川能と近代」で明治以後の黒川能 では鶴岡や酒田など周辺地域から依頼を受けての興行の様子、 藩主による上覧能の諸相、 ながらも神事能としての体裁を失うまいと努めている様子な でなく様々な需要に対応していたことや、多くの興行を行い の活動にも触れている。江戸時代の黒川能が「王祇祭」だけ めを主な理由とする開帳能の実態を、様々な資料を用いなが 開帳能の様相」では能装束や能道具の修繕資金集 第二章 黒川能 の興行と地

編。四六判29頁。 狂言 三人三様 9月。岩波書店。三〇〇〇円 茂山千作の巻』(野村萬斎・土屋恵 郎

梅原猛の巻頭言、

茂山七五三・土屋恵一郎が聞き手の

橋睦郎らが千作への思いを綴る「茂山千作の世界」から成る。 作・万作の考えが記される「狂言三人三様」、喜志哲雄・高 作独言」、(末広かり・素袍落)など八曲について萬斎・千 **「能・狂言 なんでも質問箱」**(山崎有一郎・葛西聖司著。

A5判18頁。9月。檜書店。一八〇〇円)

壱ノ箱から五ノ箱に分けられ、 答が示される。 して交えながら、 にかけて横浜能楽堂で五回にわたって行われた講座に基づく。 山崎有一郎の米寿を記念して、二〇〇一年から二〇〇二年 対談形式で能楽に関する様々な疑問への回 山崎・葛西に役者をゲストと

9月。檜書店制作。三三〇〇円 能楽用語集 観世流 前編 (江口金満著。 A判変形34頁。

うち、「神・仏・夢・幻他」「松・竹・梅・櫻・蓮・紅葉他\_ 春・夏・秋・冬他」「親・父・母・君・帝・王・翁・老人他」 『観世流謡曲百番集』に収められた曲の詞章に見える語の

- 生物」 「風月」の各項目に該当する語を曲ごとに抽出してい

髙橋昇が撮影した梅若六郎の舞台写真一五五曲分を収め、 9月。平凡社。 梅若六郎』(梅若六郎・高橋昇著。A6判変形54頁。 一九〇〇円)

社ライブラリー off シリーズの一冊。 しいかたちの「伝書」」という文章が掲載されている。平凡 末部に梅若六郎の「舞の心」と友枝昭世の「視覚で伝える新

編。四六判28頁。10月。岩波書店。三〇〇〇円] 『狂言三人三様の野村万作の巻』(野村萬斎・土屋恵一郎

らが万作への思いを綴る「野村万作の世界」から成る。 の考えが記される「狂言三人三様」、横道萬里雄・西野春雄 〈木六駄・棒縛〉など八曲について萬斎・千作・万作それぞれ 加藤周一の巻頭言、土屋恵一郎が聞き手の「万作独言」、 |世阿弥を語れば』(松岡心平編。B6判36頁。12月。岩波

二・渡辺保・丸谷才一・多田富雄・渡邊守章・観世榮夫・土 編者と大岡信・横道萬里雄・水原紫苑・松岡正剛・多木浩

書店。二三〇〇円]

との対談を通して世阿弥に迫ろうとする。 屋恵一郎との対談を集成している。様々な分野で活動する人 『すらすら読める風姿花伝』(林望著。B6判22頁。 12 月。

講談社。一六〇〇円

条々」以外は主要な段のみを取り上げているのがいささか残 加えたもの。コンパクトで読みやすいが、「第一 年来稽古 『風姿花伝』の本文・現代語訳を載せ、部分ごとに解説を

閣。二六〇〇円 『白山信仰と能面』(曾我孝司著。B6判183頁。 12 月。 雄山 念である。

について細かな考察を行っている。能が山間部にまで浸透し 重視されていた様子が明らかにされている。 出し、戦国武将と猿楽、集落の神事能、白山信仰と能面など 務しながらこれらの地域に遺された能面や様々な資料を探し を紹介している。著者は岐阜県の博物館・図書館・高校に勤 白山を取り巻く美濃・越前・加賀における中世の能の様子

『能にアクセス』(井上由理子著。A5判13頁。 12 月。 淡交

社。一六〇〇円

の三部から成り、能楽鑑賞の基礎知識を説明するとともに、 「観ながら学ぶ能のしくみ」「劇場必携曲目ダイジェスト15」

「劇場に行こう」シリーズの一冊。「能を観に行く前に」

初心者にお勧めの曲を紹介する。 狂言の演目百曲を取り上げ、見開き右頁にあらすじとみど 12月。白竜社。一八九〇円) ·狂言絵本』(橋本朝生監修、惠谷眞生絵と文。 四六判23頁。

ころ、左頁に曲のイメージを伝えるかわいらしい絵が掲載さ

れている。取り上げられた曲は「市・商い」「旅・道」「参

も望まれる。

書写の金剛流謡本も所蔵されているらしいが、これらの紹介

は決して多くないので、その点でも貴重。 及する資料で、全九十三曲分所収。

江戸期までの金剛流伝書

同所には江戸後期

読者にもその判断ができるよう、

#### 111 研究展望(平成15年)

を感じやすい内容になっている。 『野村萬斎 What is 狂言?』(野村萬斎著、 狂言の登場人物や型、 A5判17頁。12月。檜書店。二〇〇〇円 「仰」といった形で項目分けされており、 演出などに関する質問に野村が 網本尚7 子監修 河答 解

籠・信

狂言に親しみ

#### 論文

じも紹介されている。

鑑賞や狂言の理解に役立つ知識を提供する。主な曲のあらす

必要に応じて網本の解説が加えられるという形で、

狂言

# 【資料研究・資料紹介】

きる。

資料研究は謡本の一本のみであった。 本年、管見に入った資料紹介は、 謡伝書 近代史料の二本、

猶)の転写本であることがわかるが、この人物については未 今治市河野美術館蔵)の紹介。奥付から信猶(鈴木久左衛門信 成立したと目される金剛流謡伝書『うたひの聞書』(愛媛県 佐藤裕子「金剛流伝書『うたひの聞書』(影印と翻刻 曲ごとに詞章をあげ、清濁・音程・流派の違いなどに言 」 (『演劇研究センター紀要』Ⅰ。3月)は江戸中後期ごろ 解

> 華雪筆 他流派の役者を含めた約三七〇名の過去帳。 記録が主体で、いくつかのエピソードも記載する。 二筆の『おぼへ帳』。明治26年から33年までの八年間の演能 郎の次男であり、銕之丞紅雪に師事しシテ方の修業をした銑 真撮影をした観世銕之丞家文書三点の紹介。 ていた梅若家の稽古で華雪がシテを勤めた演能を中心に記録 した控え。①③からは、 『催能及一六稽古勤メタル回数扣』。 一と六のつく日に行われ 能楽資料センター紀要』 4。 3月)は能楽資料センターが写 別府真理子「解題観世銕之丞文書三点」(武蔵野女子大学 『過去牒』。銕之丞家だけではなく、観世家の人々、 明治期の能界の一端を知ることがで ③銕之丞華雪筆 ①笛方一 ②銕之丞 噌包太

点を加味する必要があり、 写しており、車屋謡本には上掛り系の詞章をもつ曲もあるこ ずることではないだろう。現に道晰は、 室町末期の上掛り謡本の影響下にあると位置づける。 謡本(全二十帖)のうち、車屋本系ではないと推測されている 能文化』13。12月)はすでに同紙で紹介されている車屋本系 とが先行研究で指摘されている。「車屋本系」の判断もその で決定することであり、 本か否かの判定は、鳥養道晣・新蔵父子の関与があるか否か B類(三帖)巻十八の研究。「砧」「敦盛」の諸本比較を行い、 徐禎完「ソウル大学蔵謡本の基礎的研究(三)」(『名古屋芸 詞章の系統が上掛りか下掛りかで断 さらに包括的な考察が望まれる。 図版の掲載も希望したい。 上掛り謡本を借り書 車屋謡

条末尾の一文もほぼ同時期に書き加えられたものとし、 花修の中で「給」が用いられている第二条の一部分と、

る。

よって紹介している点でも有用である。 題点が指摘され、特に後者は新出の『三道』をカラー図版に なった。『世阿弥十六部集』 いて」(『演劇研究センター紀要Ⅲ』平成16年1月)の論文と 学』4-4。7月)、 され、その後、「吉田文庫の世阿弥能楽論資料紹介」 上で貴重な伝本といえる。これは5月の能楽学会例会で紹介 本は関東大震災で焼失しているため、『三道』の原形に迫る 書を保管する吉田文庫から見つかったのである。松廼舎文庫 (三道)』の底本である松廼舎文庫本の影写本が吉田東伍旧蔵 東伍が 廼舎文庫本影写本の『三道』の発見だろう。明治42年に吉田 『能楽古典世阿弥十六部集』で翻刻紹介した『能作書 能楽論の本文研究最大の成果は、 及び「吉田文庫蔵新出本『三道』 の本文との相違などについて問 また、前者では、 竹本幹夫による松 <u>(</u>文

年7月刊の小杉本を翻刻した活字本は原稿と異同があり、そ の校異を書き入れた『申楽談儀』の存在も紹介する。 談儀』の原稿、吉田東伍が小杉本翻刻本文に種彦本や堀本と あるなど、『申楽談儀』校訂上の問題点が指摘されている。 田文庫や吉田東伍記念博物館から発見された、 て」(『能と狂言』 『世子六十以後申楽談儀校異並補闕』にも漏れている異文が 、付録の種彦本校異や、同年10月に堀本との校異をまとめた 『花伝』については、表章「『花伝』の書名と篇名をめぐっ 創刊号。 4月)が『花伝』全体を指す呼称 小杉本 明治41 一甲楽

> に対して、神・老人・修羅という当時普通は舞を舞うとは認 第6号、12月)は、世阿弥伝書の中で『花伝』物学条々の老 経緯や背景を整理し、七篇それぞれの統一した篇名を提唱 は、『花伝』第六花修の文脈を検討し、 持新時代における世阿弥の転向」(『芸能史研究』 識されていなかった神体・人体が演じる舞風の演技を指して し、「舞がかり」とは、舞うことを専業とする人体の舞う舞 む部分がいずれも応永二十年代中頃までに増補されたと推定 り」―増補との関連とそれが意味するもの」(『演劇学論叢 ては、以下の二本。尾本頼彦「『花伝』物学条々の「舞がか が望ましい論である。『花伝』の形成過程とその背景につい 楽研究者だけでなく、能楽に関わる諸方面にも普及すること 持時代へ変わった際の世阿弥の思想の転向を示しているとす れた部分と推定でき、それは義満時代から幽玄を重視する義 とに「強き」の意義が影をひそめている点で、後に書き足さ あり」から「危からぬは強きなり」までは「幽玄」重視のも の背景を推定する。第六花修第三条の「たゞし、心得べき事 いると論じる。重田みち「『花伝』第六花修の本文変更―義 人・修羅・神の項に四例みえる「舞がかり」という言葉を含 『花伝』を論ずる際に基礎となる呼称の問題であり、 第三条のこの部分には敬語 『花伝書』 から『風姿花伝』を経て『花伝』 「給」が用いられているが、 本文の変更部分とそ 163

天野文雄

成立事情の検討からみた帰還の蓋然性」(『能と狂言』

創刊の

「世阿弥は佐渡から帰還できたか─ 『金島書』

「薪の神事」と仮称される謡物の最終的な主題を当代【金島書』からは世阿弥の達観的な心境がうかがえる

「堯舜の説話と「家、家ニアラズ」」(『銕仙』43。5月)は「堯舜の説話と「家、家ニアラズ。継グヲモテ家トである説話と集成した『直談因縁集』両者が共に堯舜の帝位継承をめぐる話と共い、諸例の文脈を検討する。特に、心敬の『ささめごと』にし、諸例の文脈を検討する。特に、心敬の『ささめごと』にして、これまで知られていた用例の他に、この諺を用いている点は、足利義持が名君として堯舜にこの諺を用いている点は、足利義持が名君として堯舜に、諸例の文脈を検討する。

時期は弟四郎への相伝の直前であったと想定する。

まとめた書と位置づける。作った謡いものを、帰還直前の永享八年二月頃に記念としてできたとする。『金島書』は帰還できる見通しがついてから賛美と読むことができる点などから、世阿弥は佐渡から帰還

せるものだった。 世るものだった。 世るものだった。 世のいて語ったインタビューの翻訳「世阿弥と能について語ったインタビューの翻訳「世阿弥と能について」(聞き手・訳 河合祥一郎)が、掲載されている。世阿弥の言う「花」に対する深い洞察、観客と役者の問題等、そのて」(聞き手・訳 河合祥一郎)が、掲載されている。世阿弥の能、『文学』(4−4)には、二〇〇一年六月世田谷パブなお、『文学』(4−4)には、二〇〇一年六月世田谷パブ

である。 単竹能楽論に関しては、中沢新一 『精霊の王』(86版30 である。また、本書は『明宿集』の現代語訳を巻末に載 部分もある。また、本書は『明宿集』の現代語訳を巻末に載 とにした)。宿神という古層の神の性格から禅竹の思想を からむもので、ユニークで興味深い指摘が多いが、禅竹能楽 とにした)。宿神という古層の神の性格から禅竹の思想を たここの(本全体が能楽論をテーマとし の現代語訳を巻末に載 がう理由で省略されているのは、当時の抜書についての意識 とにした)。宿神という古層の神の性格から禅竹の思想を表 とにした)。宿神という古層の神の性格から禅竹の思想を表 とにした)。宿神という古層の神の性格から禅竹の思想を表 とにした)。宿神という古層の神の性格から禅竹の思想を表 とにした)。宿神という古層の神の性格から禅竹の思想を表 とにした)。宿神という古層の神の性格から禅竹の思想を表に の現代語訳を巻末に載 がう理由で省略されているのは、当時の抜書についての意識 はているが、最終条が『太神宮参詣記』からの引用であると とにした)。宿神という古層の神の性格から禅竹の思想を表にある。 3月)がある。

金論文は日本において翁の形象をもつ神の多

「殺される神考」(『演劇研究』

26

金賢旭「中世日本の渡来神信仰をめぐって」(『表象文化論研

南聲鎬

同じく東アジアの文化史の視点から(翁)を論じたものに、

# 【能楽史研究】

国における雑劇との比較研究の必要性を述べる。国における雑劇との比較研究の必要性を述べる。特別などの問題に焦点をしぼって的確にまとめ、中国・韓当性を欠き、十分に説得力のある論にはなっていない。吉村為で、大ベット仏教の事例などを参照して、能の翁を神仏習当性を欠き、十分に説得力のある論にはなっていない。吉村高は、チベット仏教の事例などを参照して、能の翁を神仏習られて、一般であるとする。随所に傾聴すべき指摘があるが、資料の解釈はやや妥固の雑劇の情報をもたらしたとするが、資料の解釈はやや妥固における雑劇との比較研究の必要性を述べる。

をすぐさま三番叟本来の性格と見るのは無理があろう。 総礼としての性格が存すると指摘する。民間伝承の中に黒い の論で、三番叟が醜い神として形象されていることに着目、 の論で、三番叟が醜い神として形象されていることに着目、 の論で、三番叟が醜い神として形象されていることに着目、 の論で、三番叟が醜い神として形象されていることに着目、 の論で、三番叟が醜い神として形象されていることに着目、 のに承を取り上げて、そこに託宣をもたらすシャーマン的性 くが渡来神であることに注目。そのうち摩多羅神や新羅明神

事を紹介したもので、その記事の後に西行の問答歌が引かれ と宮永一美「戦国大名朝倉氏による芸能の保護と越前猿楽」 の活動について、 ける活動、 永論文は、 たと見るのは、 はあるが、 ていることから、世阿弥により〈江口〉が上演された可能性を の史料に見える応永十九年四月、称名寺大宝院での猿楽の記 (『芸能史研究』 61。 4月)の二本のみ。前者は、 示唆する。関東における早期の演能記録として貴重な資料で |新出史料「応永十九年称名寺日記」の演能」(『観世』6月| 中世能楽史に関する論文はこの年は少なく、 猿楽と問答歌を一連の記事と見て、 越前猿楽を取り上げて、戦国時代以前の寺社にお 越前以外の地での活動、 やや無理があるのではなかろうか。 従来知られていなかった多くの新資料を活 戦国大名朝倉氏のもとで 世阿弥が演じ 高桑いづみ 金沢文庫蔵 後者の宮

史についての一連の論考で、今回で完結。

初代金春三郎右衛

#### 115 研究展望(平成15年)

将山岡景隆と能」(月刊 の能楽史については、ほかに小文ながら、宮本圭造「戦国武 芸風についての論には傾聴すべき見解が少なくない。 模索した氏勝の試みは、その後の歌舞伎に大きな影響を与え 武道を学ぶことにより、 道に嗜みの深かった金春七郎氏勝の芸道観を考察したもので、 美作守景隆所持」と銘のある小尉面を手がかりに、 たとする。 中・近世移行期の能役者を取り上げたものに、 3月)がある。表章による先行研究の成果を踏まえ、武 |末期の能役者と能芸観」(『学習院大学国語国文学会誌』 その結論には容易に納得できないものの、 劇能としての新たな表現の可能性を 能 546 11月)があり、「江州 伊 近江の戦 藤潤 戦国期 氏勝の 山岡 一中

表章「「大鼓金春流」考(下の二)」(同)は大鼓金春流の歴検証する。あわせて出演役者についても考証を加える。の演能の記録をもとに編纂された資料で、曲別に各年次ごとの演能の記録をもとに編纂された資料で、曲別に各年次ごと組』についての考察。同書は寛永から文化にいたる中津藩で能」(『能楽研究』27。3月)は、鴻山文庫蔵『中津藩能番能いて近世能楽史に関する論文。小林健二「中津藩の神事

武将であった山岡景隆の演能活動を紹介する。

成果に基づく有益な資料である。 に付された「大鼓金春流略年表」も、これまでの綿密な調査 の能楽資料を存分に活用した重厚な内容になっている。末尾 の能楽資料を存分に活用した重厚な内容になっている。末尾 の能楽資料を存分に活用した重厚な内容になっている。末尾 のおまび大鼓金春流の斉田家の代々についての考証が今回の中 門の子を祖とする広島藩の金春市左衛門家の代々、その別家、

考察する。これまでまとまった研究のなかった越前猿楽につ

朝倉氏による芸能保護のあり方を

いての貴重な研究成果である。

用して跡付けるとともに、

よう。 があり、 別号。3月)は、 に出席した勅使の動向などにも論及するが、 係記事を紹介する。 記』『触流し御能組』 十三代家定の将軍宣下能について、『藤岡屋日記』『梅若実日 延広由美子「徳川家定の将軍宣下祝能」 将軍宣下能の変遷を踏まえた更なる考察が求められ 嘉永六年から安政元年にかけて行なわれた 他の将軍宣下能の番組との関連、 『続徳川実紀』 所載の番組を対照し、 (『異文化交流』 やや未整理な感 宣下能 関

よう。 つか異同も見られる。 仙洞御能之記』『乱舞番組』などがあるが、 の紹介である。 嘉永元年の孝明帝まで、 は、 権藤芳一「『御即 片山家蔵の即位能番組を翻刻。宝永八年の中御門帝から 禁裏能の番組には、 位御能番組』(『芸能史研 両者を対照して活用することが望まれ 七度の即位能の番組を集成した資料 いずれも未翻刻の 本資料とはいく 究 163 10月)

大学)』87。12月)があり、江戸期の大坂勧進能・勧進狂言の学図書館蔵『勧進能并狂言尽番組』総索引」(『国文学(関西同じく上方の能番組を取り上げたものに、恵阪悟「関西大

番組集から曲名・役者名を抽出した索引を載せる。

を中心とする百名を越える人名の履歴をまとめたもの。末尾 記』に見える膨大な人名のうち、梅若実の縁戚にあたる人物 たち」(『能楽資料センター紀要』4)は、その『梅若実日 三浦裕子・氣多恵子・城崎陽子「『梅若実日記』の登場人物 年の傾向であり、今後ますます盛んになっていくであろう。 する論文が多く発表された。近代能楽史研究の活況はここ数 経賢による寛文三年禁中能の記録」(『能』矧。6月)がある。 8月)、寛文三年の禁裏能の記録を紹介した重田みち「舟橋 た松田存「幕藩体制下の猿楽能」(『総合芸術としての能』 3月)、斉藤月岑の『武江年表』から能の関連記事を抽出 関係の笑話をもとに、近世の能受容の一面を紹介した西哲生 「『私可多咄』にみる近世の能楽享受」(『武蔵野日本文学』 ほかに、寛文十一年刊の仮名草子『私可多咄』に見える能 『梅若実日記』の刊行を受けて、この年も近代能楽史に関 12 9 ī

に索引も付す。

る。

その論争の背景に潜む能楽に対する世代間の認識の相違を見なれた伏見稲荷大社の能舞台建設の経緯と、同舞台で催された伏見稲荷大社の能舞台建設の経緯と、同舞台で催された「大見稲荷大社の能舞台建設の経緯と、同舞台で催された大見稲荷大社の能舞台建設の経緯と、同舞台で催された「常書店創業のころ」(『観世』2・3・4月)は、檜書店蔵の「檜書店創業のころ」(『観世』2・3・4月)は、檜書店蔵のに付された「伏見稲荷大社能舞台年表」も有益。宮本圭造に付された「伏見稲荷大社の能舞台年表」も有益。宮本圭造に付された「伏見稲荷大社の能舞台年表」の行方」(明治家が幕末・明治にかけて謡本書肆として成長していく過程を家が幕末・明治にかけて謡本書は、大正四年の佐々政一の「能った」(伏見稲荷大社の能舞台)(伏見稲荷大社『朱』天野文雄「伏見稲荷大社の能舞台」(伏見稲荷大社『朱』天野文雄「伏見稲荷大社の能舞台」(伏見稲荷大社『朱』

傾向があるが、 あるとする。能装束の研究はしばしば作品の検討のみに偏る 性などを指摘して、慶長年間に編年づけられる貴重な作例で 秀吉からの拝領品が多く含まれることを確認した上で、 立博物館蔵の金春家伝来能装束についての論。『太閤 編年に関する考察」(『MUSEUM』 を明らかにしたすぐれた論。 唐織の作例を詳細に検討、秀吉ゆかりの高台寺打敷との共通 『隣忠見聞集』などをもとに、金春家伝来の唐織の中に豊臣 続いて能面・能装束関係の論文。小山弓弦葉「初期唐織 記録類をも活用し、 能装束伝来の歴史的背景 585 8月)は、 東京国 記 や

はその朱漆書の用語の検討に始まり、鳥取藩が能面を収 池田藩旧蔵面には面裏に入手の年時や作者を示す漆書が記さ 要』19。 3月)は、泉屋博古館蔵の住友春翠収集の能面をめ されていないものの)右の指摘を受ける形で訂正されている。 芸能文化』4・15に続考をまとめているが、そこでは(明 稿はこの後、更なる膨大な資料の調査成果をもとに『名古屋 めぐって」(芸能史研究会01年5月例会)と題する報告で指摘 本が見市泰男氏とともに、「鳥取池田藩における能面収集を た経緯などを詳細に論じる。ただし、 現在各所に分蔵される鳥取池田藩旧蔵の能面についての考察。 (『名古屋芸能文化』 したように、鳥取藩の京都伏見屋敷とすべきであろう。保田 ンの姿を能面収集という視点から論じた労作である。 ついて詳細に検討。第二章「住友春翠の趣味と能・狂言」で ぐる考察で、入手年時・経路ごとに分類して、主要な作例に 「伏見」を江戸の道具商伏見屋であるとするのは失考で、 内海靖子「泉屋博古館の面をめぐる近代」(『泉屋博古館紀 近世能面史に多くの手がかりを提供しているが、 田紹雲 春翠の伝記『住友春翠』をもとに、彼の能愛好の歩みを 能面収集の背景を明らかにする。 「因州侯(鳥取藩池田家)旧蔵能面に関する考察\_ 13。 12月)は、 大正八年に売り立てられ、 同稿が朱漆書に見える 近代の能のパ 保田稿 ١

## 【作品研究

室町後期・末期の作品研究は本年も精力的に進められたが、

評価を得ている〈花筺〉が未解決のまま抱えている諸問

をお断りしておく。雑誌、あるいはジャンルごとにまとめている部分もあることもあった。以下、大まかには時代順に概観するが、執筆者やそれに加え、世阿弥時代の作品に関する論考が多く出た年で

学部論集(言語・文学篇)』23。 に関する論に、 なおしたこと、 こと、別離と再会の枠組みを「向去却来」という禅語で捉え 狂だったものを、 縁譚を淵源に持つ〈丹後物狂〉との比較から、 られ」ていることを、資料に基づき示した後、 える、作品研究。 ぐる孝養と恩愛の葛藤と大団円の結末を持つ、 成果)とに精緻な吟味を加え、「物狂能は、 型」「追放型」「身売り型」それぞれの古曲と、その淵源と見 と親の別離再会譚を構想の骨格としている」とし、「出家 の物狂能」のうち、 の強調」を図っていること等が説かれている。 の趣向や達成を明らかにしていく。本来は夫婦が登場する物 から生まれた」との結論を導く。同 なしうる「出家因縁譚」(これらの発見・紹介自体が大きな (『国語国文』 12-2。 2月)は、右の総論に対する各論ともい 大谷節子「物狂能遡源」 追善説法の場を涅槃会と重ねることで「恩愛 西村聡「〈花筺〉達成論の更新」 母のみ登場の女物狂能に改変したであろう 同曲が「高僧の出家因縁譚の類型を基に作 氏のいわゆる「甲類」は、「全て幼い (『能と狂言』 3月)が 「「敷地物狂」の位置」 あり、 創刊号)は、 出家(身売り)をめ 〈敷地物狂〉独白 因縁譚の類型 傑作として高 同じく物狂能 同じく出家因 (『金沢大学文 「思ひ 故

背景の考察だけでなく、

大成期に能がいかに作られたかとい

開―「放下」「遊狂」「物狂」の語義の検討から」については 力のある読みを示す。澤野加奈「世阿弥における物狂能の展 帝の恩寵のありがたさを強調するのが目的と、それぞれ説得 は恋の不安と絶望を見、一方「李夫人」 とする。また、後場のシテ登場段の道行きと続く狂乱の段に 公として、史実とは別に天照大神に通じる照日前を創作した 弥は、そうした「筐の女御」の前世譚を統一する新たな主人 上り詰める」古形は「中世的な本地物の骨格を」持ち、 とりあげて考察している。 楽論研究」の項で触れている(15頁参照)。 結末部の 哥] の曲舞を舞う段は、 で「シテが 国 世

る当時の理解に添った戯曲構造であることを示す。その上で、 郎によって示された典拠と比較しつつ分析し、守屋と太子 究センター紀要』I)は、〈守屋〉の特に後場に注目、 れているのみなのは残念。さらに詳しい論の展開を期待した を遂げていくための種子が胚胎している」という結論も興味 で表現せよ」という提起ではないかと読む。 技の「一対一の対応関係」をやめ、 面も謡どおり写実的に演じていた井阿弥原作に対し、謡と演 本曲に関する世阿弥の発言について、「守屋の首を斬る」場 両者が相互に付随しながら一つの真理を体現する」と捉え 平林一成「能《守屋》の戯曲構造に関する試論」 世阿弥の批判に「総合芸術としての能楽が画期的な変貌 世阿弥による改訂について、 首を斬る所作も「謡のみ 最後に十数行で触 後場の分析自体 (『演劇 阿部泰

を挙げる。 はふたたび、 があること、 忌陞座』に南北朝統一を「合浦還珠」に喩え、 として解されることの多かった〈合浦〉を、 楽の演能記録があり、 神璽(勾玉)の京都帰還をめぐって―」 (福田晃監修『伝承文 と推測する。同「《合浦》の成立と南北朝統一―明徳三年の 曲が応永二十七年秋冬の将軍義持の大患を背景に製作された 周辺の禅僧による「叙」や「記」との共通点を根拠に、 がかりとし、飛鳥井雅縁の 代ではなく「この君」の長寿(延命)を強調していることを手 弥時代の政治状況と作能の関連を考察する論考。 冬の義持の大患をめぐって―」 (『演劇学論叢』 作能状況を考察するところに特徴がある。 稿の手法はより具体的にある特定の事件・事例と結びつけて ることがあるの て読む。その根拠として、 合一に際しての神璽帰還を祝福するために制作された曲とし 化の展望―日本の民俗・古典・芸能―』三弥井書店。 節があり、 同じく王権と作能の関係を探る論で、永享四年に矢田 能が時の権力者の意に叶うところを狙って作られ 「《老松》 これが神璽帰還の寓意となっていることの二点 終曲部に『蒙求』「妄還嘗珠」を踏まえた「玉 帰る御代の」という、童話的作風にそぐわない は、 以前から指摘されていたことだが、 の主題と成立の背景―応永二十七年秋 従来「異類報恩譚」という童話的作品 後代の史料ながら『鹿苑院殿百年 『雅縁卿千首』の「亀」歌や義持 個々の作品の成立 明徳三年の南北朝 6)は、 称賛する一節 1月

Ŕ,

周辺で作られた可能性を示唆する論、

〈箙〉に読み本系・

#### 119 研究展望(平成15年)

ことには、九州平定を寿ぐという目的があることを推測する。 題を見る。そのうえで、蒙古襲来以来注目をあつめていた神 書」(『観世』 7月) は、当時、 能を比較し、 武久堅「作品研究〈屋島〉」(『観世』8・9月)は、上・下に 功皇后を祭る筥崎宮を舞台とし、皇后をシテとする能を作る 作品の背景に、 いる神能に九州を舞台とする能が三曲あることを足がかりに、 レポートを兼ねた論考。 済という使命から開放されており、救済どころかシテを ることが多いのに対し、〈屋島〉のワキは、初めからシテの救 る。「下」では、夢幻能のワキがシテを成仏へと導く役とな ないが〈屋島〉では「兼房」としている点から、『義経記』の 家物語』では義経が弓を拾ったことを咎める人物の名を挙げ 分けて掲載。「上」は〈屋島〉の典拠を中心とした論考で、『平 命を負っている、という読みを示す。 「「閻浮の故郷」「修羅の巷」に呼び戻す「天魔」」としての使 |関与||を説き、従来の〈屋島〉成立論に新たな視点を提示す ?代の能を扱う。松岡心平「「箱崎」 の背景についての覚 このほか、 歌| 162 「看聞日記紙背文書連歌」をめぐって―」(『藝能史 7月)は、 世阿弥の能作の背景を探る論考。 小川佳世子 義満政権下の最重要政治課題であった九州問 「看聞日記紙背文書連歌」と世阿弥作の 『三道』の模範曲として挙げられ 「世阿弥晩年期の能の表現と応永期 復曲作業中であった〈箱崎〉 論の中では、 Ď て

> 文書連歌」と同じ美意識が認められることを指摘する。 のに『花鏡』にいう「冷えたる曲」に〈砧〉が該当し、「紙背らに『花鏡』にいう「冷えたる曲」に〈砧〉が該当し、「紙背佐用姫〉などは同じ知識基盤の上に成り立っていること、さずる〈野宮〉、歌学書との影響関係が認められる〈錦木〉〈松浦須磨を舞台とする〈松風〉〈敦盛〉〈忠度〉、「源氏名寄」と類似「紙背文書連歌」と能の直接的影響関係は示唆していないが、

うことへの大きな問題提起となってい

る

『観世』の特集に合わせた作品研究は、二本が世阿弥

王」の詞章と『二帖抄見聞』 仏牙舎利相伝系図をもとに盛久一族が清水信仰と密接な関係 保山〉に近接したところで〈室君〉が成立したことを示す論、 番組所見曲を機軸に、 状況、十二次郎の所演目と十二五郎との関係などについての されている。田口和夫「応永三十四年演能番組研究につい 番組」をめぐるシンポジウムのパネリスト四名の発表が掲載 究」のコーナーが設けられており、創刊号には、 があることを示し、 覧表が便利。 問題提起。所演目についての先行研究の見解や関連資料の一 めぐって―」(『観世』平12年10月)の紹介と当時の観世座の の二十)世阿弥出家直後の観世座―応永三十四年演能記録を て」は先行研究である八嶌幸子「「応永卅四年演能記録」に 能楽学会・世阿弥忌セミナーで行われた「応永三十四年演能 ついて」(『観世』平12年8月)、 前掲の『能と狂言』には通常の論文とは別に、「テーマ 落合博志 〈盛久〉の成立背景を探る論、「一児二山 関係曲の成立背景にも言及する。 「所見曲に関するいくつかの問題 の記事をもとに〈大江山〉が義持 表章「《観世流史》 平成14年の 参究(そ

は番組所見曲のうち〈業平〉〈仏原〉を考察した論。〈業平〉につ

測する論からなる。山中玲子「応永三十四年の女体幽霊能

いて表稿は〈雲林院〉を想定したが、世阿弥自筆本〈雲林院〉が

「業平」と呼ぶに相応しくなく、 『申楽談儀』でも「雲林院

には広略二系統のテキストがあったことが知られていたと推本系双方のテキストの影響があることを示し、当時の能作者

には従来から元雅作と言われていた曲もあることを踏まえた研には従来から元雅作と言われていた曲もあることを根拠には従来から元雅作と言われていた曲もあることを根拠には従来から元雅作と言われていた曲もあることを根拠には従来から元雅作と言われていた曲もあることを根拠にこと、三郎所演曲は、いずれも世阿弥作である可能性が低いこと、三郎所演曲は、いずれも世阿弥作である可能性が低いこと、三郎所演曲は、いずれも世阿弥作である可能性が低いこと、三郎所演曲は、いずれも世阿弥作である可能性が低いこと、三郎所演曲は、いずれも世阿弥明をシテとする女能であったまた〈虎送〉については本来虎御前をシテとする女能であったまた〈虎送〉については本来虎御前をシテとする女能である。 本書といら、芸域の狭さを指摘する。「応永三十四年演能が、本テーマ研究はその史料の問題点を具体化し、何が論じが、本テーマ研究はその史料の問題点を具体化し、何が論じが、本テーマ研究はその中であるが、本テーマ研究はその中であるが、本テーマ研究はその状态が、特別が、大田の発表を関する。

> 貌」『文学』4-4。7月)は、〈葵上〉と〈野宮〉を取り上げ、 討する。 作の可能性が高い〈杜若〉〈小塩〉の詞章を、『伊勢物語』古注 宅晶子「一条兼良と金春禅竹」(『中世文学』) 48。 6月)は 究の深化が望まれる。 たるべき父の不在ゆえにひとたびは崩壊の危機に瀕した 川〉に注目。近似する構想を持つ〈竹雪〉にも触れつつ、 するが神仏の霊験によって蘇生する「恩愛霊験能」の〈藍染 を中心に」(『日本文学』52-7。7月)は、 る。石井倫子「解体する「家」とその再生―〈藍染川〉の世界 六条御息所が「意外にも平凡な人物」であると析出してみせ 射」しようという試み。生霊という要素を取り除いてみると、 から、そこに兼良の影響力を推測する。同「六条御息所の変 塩〉には古注色が薄く『伊勢物語愚見抄』と矛盾しないこと および古注説に否定的な兼良の『伊勢物語愚見抄』と比較検 一条兼良と金春禅竹の間には濃密な交渉があったとし、 能作者が読み取った六条御息所像から『源氏物語』を逆照 禅竹関係の作品を扱ったものは、三本が管見に入った。三 (杜若)は古注によって作られているものの、 家族の一員が死亡

の段階で成仏していると設定する工夫があることを論じる。ことや、女体の幽霊に呂中干舞を舞わせるために後シテ登場霊であることを示唆する詞章を世阿弥が意図的に用いていた体幽霊能の特色に言及し、前シテ登場の場面でその人物が幽定する。また〈仏原〉については、本曲を元に世阿弥時代の女能」と呼ばれている以上その可能性は低いとし、〈井筒〉を想

よ」は「義覚・義元」に由来するという天野文雄の指摘を踏景にある伝承・宗教的理解を探る論考。シテの「ぎがくぎに川崎剛志「作品研究〈谷行〉」(『観世』3月)は、〈谷行〉の背以下、室町後期・末期の作品を扱った研究に、順に触れる。

再生の物語、」として読む。

家」が、父その人によってその絆を取り戻すまでの

神事猿楽に際して新作された可能性があること、 泰が関与している可能性があること、 得た在地性の強い曲であること、 仏薬師の縁起を典拠とし、 の成立背景を検討したもので、同曲が丹後地方に流布した七 文』に長俊作として挙がる「みうえが嵩」と目される〈丸子〉 子》をめぐって―」(『能と狂言』 |林健二「観世長俊の作能法における一特色||番外曲 「萬集類 所収「みうゑ」が演じられた可能性が高 当地に残る絵巻・ 作能に三条西実隆・窪田統 創刊号)は、『能本作 天文年間に竹 掛幅絵に着想を 間 配言に大い野神社の 兪

にも有効と思われた。

た詞章か)を判断するという方法は、

他の切合能を考える際

今後さらに議論があってよいテーマであろう。

場所に働事が入っていたかどうか(働事を前提として作られ

切る詞章」とその前後の登場人物の動きに注目し、

本来その

場面を簡潔にし後場の合戦場面の中心に働事を置くという特

切合能を考える際の視座として「(場面を)区

『平家物語』やそれ以前の切合能との比較から、

前場の恩愛

〈光季〉〈知忠〉を取り上げ、典拠たる『承久記』、八坂系諸!

合能」(『法政大学大学院紀要』 51。身説の影響があることを指摘する。

松若には親孝行として知られる役行者像が重ね合わされてて広まっていた大峯の二鬼の伝承の影響があること、子方

物語の場には法華経の聖地としての伝承や、

に見られる葛木峯・霊鷲山同体説、

10月)は信光作とされる伊海孝充「観世信光の切

役行者=釈迦後

まえながら、

室町期に役行者の弟子説、

夫婦鬼説の二説とし

徴を指摘する。

とを示唆する論となっており、これまでの作品研究ではあま とを推測する。この二稿は作品の成立が特定の場と関わるこ 川氏に降参した後の饗宴であり、 で、この催しが、 境にある河守を舞台としていることを明らかにする。 測した論考で、真名で書かれた金札が降るという構想を〈金 である〈真名井原〉が、このとき新作された曲であることを推 承文化の展望』) は、 前掲の天野稿と同様に、 いた丹波猿楽の梅若に新作・上演を依頼した可能性が高いこ いことを論証する。 丹後細 取り上げられなかった視点から、曲の特色に迫っている。 先行する曲の影響が強いことや、この曲が丹後と丹波 川能番組 詞章は〈竹生島〉〈邯鄲〉の一節を参照しているな 当地の国人層を出自とする上原福寿軒が細 に見られる上演記録 同能番組の天正十一年の演能記録が初出 同 能 作能と演能の「場」との 《真名井原》 当時織田信長の贔屓を得て をめぐって―」(『伝 制作の動機と背景 れりり その上 n

われる」との指摘が面白かった。江口文恵「観世弥次郎長俊場合は「人物を「生かす」ことにこだわっているようにも思人物を華々しく「散らせる」」ことが多いのに対し、長俊のを取り合わせた作品」と結論づける。信光作品が「能の中心を取り合わせた作品」と結論づける。信光作品が「能の中心を取り合わせた作品」と結論づける。3月)は、〈樒塚〉の諸本考察」(『立正大学大学院年報』20。3月)は、〈樒塚〉の諸本長俊に関連した論が他に三本。高山尚子「番外曲〈樒塚〉の長後に関連した論が他に三本。高山尚子「番外曲〈樒塚〉の

るが、これまで注目されてこなかった資料が丁寧に分析され 山の国清寺に訪れたときの日記『参天台五台山記』に『景徳 の設定と大きな差異があることを指摘した上で、成尋が天台 摘されていた『宋高僧伝』は、文殊の化身が寒山とする後場 紀要には、裵文卿「作品研究〈豊干〉」も掲載。従来典拠と指 言われていた長俊の特徴とは別の面を明らかにしている。 俊作品が演じやすいように改作されている例を示す。①~③ 後期筆米沢上杉本をもとに、後代、スペクタクル性に富む長 あること、の三点を指摘、さらに演出注記などに詳しい江戸 と〈廣元〉に類似表現が見られるように、 長俊作品の常套句が に、先行作品の影響が強いこと、③〈河水〉と〈老子〉、 度が高いこと、②〈異国退治〉に〈鵜羽〉の影響が見られるよう ある『平家物語』をそのまま引用するといった素材への依存 長俊作品の特徴として、①〈厳島〉に見られるように、 俊周辺で作られた可能性を示唆する。 る文殊・普賢像は中世の嗜好が投影されていると推測し、長 山像は『寒山詩集』と類似し、本来童子であったと想像され を楽しみ衆生済度のために世俗にまみえることを厭わない寒 る点から、「二次的資料」の存在を想定する。さらに、 伝灯録』の覚書として引用されている記事と〈豊干〉が類似す 作詞法と後世の評価」(『演劇研究センター紀要』Ⅰ)は、 どれもタイトルに言うとおり「作詞法」の指摘で、従来 典型的な本説研究であ 風雅 同

推測も示す。

若い人の論考を、もう二本紹介する。都築則幸「廃曲〈粉

さわしくなかったことが上演されなくなった理由であるとのまた高安の女の「飯貝取る」行為が舞を舞う主人公としてふたであろう」笛吹の松の伝承の上に立脚していると論ずる。、たであろう」笛吹の松の伝承の上に立脚していると論ずる。などの古注釈と比較検討し、「伊勢物語注釈との関わりを中心に―」(『同志社国文学』58。3たとする。橋場夕佳「謡曲《高安》の背景とその行方―伊勢たとする。橋場夕佳「謡曲《高安》の背景とその行方―伊勢たとする。橋場夕佳「謡曲《高安》の背景とその行方―伊勢たとする。橋場夕佳「謡曲《高安》の背景とその行方―伊勢などする。 「一」(『同志社国文学』58。3 「一」(『同志社国文学』58。3 「一」(『同志社国文学研究』10。 「一」(『国文学研究』10。

『銕仙』の「研究十二月往来」には作品研究は一本のみ。 『銕仙』の「研究十二月往来」には作品研究は一本のみ。 『銕仙』の「研究十二月往来」には作品研究は一本のみ。

ることで、 れる不足感を補う役割を担ったとする。 ぐって—」は、 当時の元章を取り巻く学問状況」を考えることは重要であろ (当麻)を 小書「乏佐走」考―《誓願寺》《当麻》の後シテの装束をめ や小書の 出立が元章の新考案で、舞事の省略や短縮化によって生 他曲についても考察を広げていってほしい。 「同列化」し菩薩像を共有させるとともに曲籍の違 有無による後シテ装束のバリエーションを設定す 両 曲 演出史研究。蓮華を天冠にかざす「乏佐走 の 演出に幅や深みを持たせる効果があったと また、〈誓願寺〉と 長田あかね

> たいと考える専門外の 記述されており、 飾的奏法として無視して良い点とを具体的に挙げつつ丁寧に を比較対照する際に重視せねばならぬ点と、 目新しいものではないが、 部分も「一噌流を基とする可能性を妥当」とする結論自体は ら一噌流系と考えられてきた伝書付載のものなので、 (『東洋音楽研究』 68。 付唱歌』に関する一試論―唱歌付の系統解明にむけて―」 きく変えるものだった。森田都紀「大蔵虎明筆 た謡は、 画公演「秀吉が見た『卒都婆小町』」(02年11月)で演じられ 結論に至る。なお、この研究成果をも活かし、 りも音の動きが多く、 本に書き込まれた五声(宮商角徴羽)を基に分析し、「現在よ 代の謡の旋律を復元する試み。『塵芥抄』や能研蔵 進手沢車屋謡本本節付考」(『能と狂言』 演出 華やかな旋律と軽やかなリズムで能のイメージを大 技法関係の論考が、 演出・ 歌謡としての性格が濃厚だった」との 8月)は短編の「研究ノート」。 人々にも益するところが多い。 技法研究の資料として唱歌付を使 途中の論述部分は、 他に二本。 髙桑いづみ 創刊号) 記述法の差や装 複数の 横浜能楽堂企 『聞書并笛集 は の 下間 唱歌付 従来か 唱 車 屋 山

沢本『習十番』の書入をめぐって―」は、

明和本にお

ける

〈関寺小町〉の改訂を、早稲田大学演劇博物館蔵の『元章手沢

かにする。

忠実に沿った結果の改訂」が多いとの結論は予測の範囲内だ

書き入れの内容を丁寧に分析することで、「明和

本

刌

記載の〈関寺小町〉演能記録を紹介・考察したもの。「典拠に本写」に見える元章の書き入れに基づき分析し、併せて同書

濁音から清音への改訂を調査し、観世流を中心とした現代の

五曲を対象に、「くれはどり」から「くれはとり」のような、

|濁音から清音への改訂をめぐって―| は、

三本の論考が載る。

以上、

叢』6には「共同研究:観世元章の能楽改革(2)」として、

天野文雄「明和改正謡本と現代の能(一)

明和本内組の五

オーソドックスな作品研究を並べたが、

『演劇学論

詞章の清濁に元章の改訂が与えた影響多大であることを明ら

橋場夕佳「観世太夫元章と《関寺小町》―元章手

## 狂言研究】

編』51。2月)は、表題の書の翻刻の三回目で、巻二の前半館蔵)翻刻・解題三」(『愛知県立大学文学部論集国文学科野崎典子・小谷成子「『和泉流秘書』(愛知県立大学附属図書まず資料紹介・資料研究から。和泉流台本の翻刻が二編。

跡がそのまま残されており、今後の検討が待たれる。 元喬本(下)」(『能楽資料センター紀要』 刻の二回目で、後半の七曲を収め、完結。本文には改訂の 曲を収める。雲形本研究会「翻刻 14 は、 和泉流狂言 表題の書の 1 『六儀

み

はこれまで触れられたこともないのも事実である。安永森本 とっては常識で、取り上げるほどのことかとも思えるが、実 八巻狂言篇上』に拠ったことを明らかにする。狂言研究者に 流」として収める一二曲が安永森本を翻刻した『謡曲文庫第 大学大学院『論究』35-1。3月)は、『狂言集成』に「鷺 ことを指摘する。朝留和洋「『狂言集成』の「鷺流」」(中央 古いものではあるが、卑俗さや近世的な語法や用語が見える 語研究』8。11月)は、(一)に続いて祝本の六曲を検討し、 について(二)―狂言記・他台本との比較から―」(『筑波日本 文には誤読がある。 が、まともな検討が必要であろう。 れるのもその通りで、私が「頃」を付すのもそのためなのだ の成立時期を示すとされた年記が一曲の付記に過ぎないとさ 国語学研究者による台本研究が二編。大倉浩「祝本狂言集 ただし列挙された付記本

よる狂言等の名寄の翻刻。 山本直義(長州藩狂言方山本弥八家に関係するかとのこと)に 蔵)」(『山口県立大学大学院論集』 稲田秀雄「〔翻刻〕狂言名寄・内外間名寄(山口県立大学 鷺伝右衛門派のもので、狂言には 4。3月)は、 天保三年、

装束付が付記されている。 大蔵流の江戸前期の資料の紹介が相次いでいる。 高桑いづ

> 意識したものであること、 て」(『能楽資料センター紀要』4)は、延宝二年の大蔵栄虎 田英悟「延宝二年の大坂勧進狂言―番組と出演者をめぐっ 流狂言秘本』が上演された形跡のない台本であるとする。池 狂言史の一側面に迫る。またこの家に伝わったという『大蔵 各種資料を加えて事績を追い、長大夫家の消長を見ることで 蔵長大夫家考」(『能楽研究』27)は、大蔵流の分家である長 実物である。これらを活用した大蔵流史の構築が期待される。 状の翻刻。『わらんべ草』に「親より印可」と見えるもの 狂言』創刊号)は、寛永七、八年に虎清が虎明に与えた印 状。関屋俊彦「大蔵弥右衛門家蔵『狂言印可勘状』」(『能と である。後者は万治三年に虎明が大倉助左衛門に与えた相伝 狂言論書と言うべきもの。虎清にもこの種の伝書があったの 前者が寛永一八年に大蔵虎清が清虎に与えた狂言の心得等で 子「『大蔵虎清狂言伝書』 『大蔵虎明伝授目録』」 (同上)は、 は違うものらしいが、関連するものに違いなかろう。 て全文を翻刻する。『わらんべ草』に言う「式三番の本」と が実はこの書の後半部分であったとして、錯簡を正し、 による大坂勧進狂言について、番組が父虎明の堺勧進狂言を 大夫家三代の上演記録のすべてを一覧表として載せ、それに 次に史的研究。江戸前期を扱うものが二編。 の書の翻刻。 「大蔵虎明筆『式三番』」(『芸能の科学』 先に『代伝抄』として翻刻した書の後半部分 南都禰宜衆の出演が目立つことな **3**0 **楯本朝生**「大 3月)は、

背景としての稲荷信仰を考え、

小浜市和久里の壬生狂言の

〈釣狐〉の

荷信仰」(『伝承文化の展望』)は、単行本の一編で、

以下個別の作品研究。

大森恵子「狂言「釣狐」の演出と稲

#### 125 研究展望(平成15年)

八代とされる久蔵英政の伝書『花咲傳』を読み解き、 世狂言への視座―」(『演劇学論叢』 6)は、 目控』の翻刻を付載する。川上孝也「『花咲傳』を読む―近 うというシステムがあったことを明らかにする。『大蔵流式 江戸住みの家元から地方の弟子へ「名代」を介して伝授を行 いて八右衛門虎良に弟子入りして伝授を受けたことを追い、 の家の江戸後期の人たちが大蔵八右衛門派の山川正九郎、 匠・弟子―江戸後期西本願寺家臣の狂言入門―」 (『河南 大蔵流狂言を支えた英政の意識に迫ろうとする。 次に作品研究。 6月)は、西本願寺の家臣、上原家の文書から、 座頭狂言を扱うものが二編。 茂山千五郎家の 山下宏明 京都

仰を取り上げ、 ようとするもので、〈川上〉と地蔵信仰、 13 ギャップがあるとして、時代の差によるものかとする。金蘭 |言の笑いと能―平家琵琶を介して―」 (『愛知淑徳大学論集』 たたくましい盲人芸能者の姿」を認める。 珠『「座頭狂言』の笑いと仏教』(『日本語・日本文化研究』 28。 3月)は、〈丼礑〉を例に盲人への悪意に満ちた笑いを狂 11月)は、座頭狂言の笑いを仏教との関わりから解釈し 能で盲人を畏怖すべき対象とすることとの間に 座頭に「苦難に耐えて、 根強く生き抜いてき 〈清水座頭〉と観音信 狂

0)

を紹介し、後半に三味線の伴奏による踊りが入るのを、 伊勢市馬瀬の馬瀬狂言で伝承されていた〈こんくわい〉の台本 (4)—「こんくわい」について—」(『学苑』75。 〈狐釣り〉との違いに触れる。山本晶子「馬瀬狂言資料の紹介 3月)は、

の影響によるかとする。これらは〈釣狐〉の受容として興味深 神宮のお木曳という場で演じられたことと関係し、照葉狂言 、後期を扱うもの

編。小林英一「家元・

名代・

師

ح 続

「狂言〈止動方角〉の馬と呪文」(文教大学『言語と文化』 15。 を祝本を参照して「けんさん(建盞)」の誤写かとする。 集」(『銕仙』510。2月)は、 万菩薩、しづまり給へしたうはうがく」について検討し、 3月)は、〈止動方角〉の馬を鎮める呪文「じやくれん童子六 四道方角」で、「寂連童子ならびに六万菩薩たちよ、 |口和夫「〈附子〉の古型―天正狂言本の誤写と祝本狂 天正本〈附子砂糖〉の「ゑさん」

Ö

田

のであることを論ずる。 と、その〈鶏猫〉は『呂氏春秋』を典拠とする能〈羊〉によるも 意とする。同「『呂氏春秋』から〈羊〉〈鶏猫〉まで」(『銕 58。11月)は、和泉流〈牛盗人〉が〈鶏猫〉から作られたこ

りください。涅槃に至る道に入った聖者たちの方を御覧なさ

い(絶対に騒がしくなどはしていませんよ。見習いなさい)」

そうした話が古くから説法の種として語られていたかとする。 文』33。3月)は、〈八尾〉に類似する話が八尾の里にまつわ る『敬白萬人講縁起之事』という縁起にあることを指摘し、 小林健二「狂言《八尾》の筋立ての源流」(『大谷女子大国

編』が古い形を示すかとする。これらは狂言への仏教の影響 を説法の場で聞いたのではないかとする。また『狂言記外 抄』に見える寓話に類似しており、 を具体的に検証するものである。 と狂言』創刊号)は、 また地蔵と閻魔の男色の話は後に加えられた趣向であるとす 橋本朝生「狂言と唯識 〈杭か人か〉が唯識教学の書『法相二巻 ―〈杭か人か〉の形成と展開」 (『能 作り手が唯識教学の教え

千草「狂言「獅子聟」と信長の聟入り」(学燈社『国文学』 ことで、どこで作られたのかが知りたいところである。小林 奥山けい子「「千人切」考」(『東京成徳大学研究紀要』10。 の心理的かけひきを重ね合せてみる。 9月)は、〈獅子聟〉に織田信長の聟入りの場での齋藤道三と 切〉によったものとする。 3月)は、黒川能の狂言に伝承された〈千人切〉が番外能〈千人 文字」の特集に寄せたもので、 関屋俊彦「狂言《伊文字》の周辺」(『紫明』 綾子舞その他にも類曲があるとの 狂言のことば遊びの紹介。 12 3月)は、

0

本の形が昔話の話型に近いとする。 集』第十四集。清文堂出版。10月)は〈鏡男〉に触れて、 なお単行本の一編だが、大谷雅夫「形見の鏡」(『説話論

の ル (『聖母女学院短期大学研究紀要』32。3月)は、英一蝶の描 舞台を描いていて演出の考察に資するものとする。作者 蔵「狂言絵巻」について検討し、 た狂言絵とその模本を紹介し、特にリチャード・P・ゲー 次に演出研究的なもの。藤岡道子「英一蝶の描いた狂 江戸の元禄期前後の実際

> どがあるとする。 せ所への契機となる場合、 検討した上で、場所の移動のもたらす演劇的効果を考え、 を考える一連の論考の完結編。 奈川工科大学研究報告』A―27。3月)は、狂言の空間表現 れる場所と移動 成立時期のわかる狂言絵は貴重である。 その3. 意外な展開への布石となる場合な 異次元の場所・演劇的 霊界等の異次元空間について 坂場順子 |効果| 狂言に現

歌謡には中世後期から近世初期にかけての歌謡と交渉するも えようとする。成り立ちに座敷芸としての性格を持つものと 狂言・間狂言と並ぶ狂言役者の担当分野として位置付けて考 (『山口県立大学国際文化学部紀要』9。 があるとする。 珍しく狂言小舞を扱うのが稲田秀雄 分類案を示しつつ各曲に検討を加え、小舞に用いられる 「狂言小舞の性 3月)で、 小舞を本

月)は、 正保本とを比較し、寛永本に改訂の跡が認めら 文学論叢』48。 3月)は、虎明の間狂言台本二種、 とらしい。岩崎雅彦「跋扈する異類と妖怪」(『国文学』9 に子息に与えた正保本の方が本来の形を残しているというこ 奇異なようだが、虎時時代の寛永本に工夫の跡があり、 照して行われたとする。 〈融〉〈雲林院〉の場合は『伊勢物語闕疑抄』などの伊勢注を参 次に間狂言研究。長田あかね「大蔵虎明による間語り改訂 『伊勢物語』関連曲《融》〈雲林院〉をめぐって―」(『国 (山姥)の間狂言で山姥の成り立ちを語る部分を三流 先にできた寛永本に改訂があるのは れ、 寛永本と それが

るものである。

#### 127 研究展望(平成15年)

和泉家伝来に違いないが、ここに示された全冊の目録や詞章 12)に「山脇家間之本」として紹介されていたもので、 間につきての研究―和泉流本―」(『日本演劇史論叢』 ろな異説が取り入れられていったとする。 が大事だなどの心得を語る。 る〈八島(屋島)〉の替間〈奈須与市語〉について、 語について語る」(『観世』11月)は、 を見るに大蔵流のものである。 屋狂言共同社所蔵山脇和泉家伝来九冊組間狂言本(一)」 の語り間一九曲を収める。この本は笹野堅 屋芸能文化』13。12月)は、 ?違いない。なお野村万作(聞き手 表題の 古く貴重なものであることは 語リとしても演じられ 中司由起子)「奈須与市 書の翻刻の一回目 飯塚恵理人「名古 「古本能狂言 語り手の位置 山 昭 で脇 脇 和

で比較し、

器物が妖怪になるという付喪神の考え方にい

ろ

切さを吟味していたとする。 筆録者の する一連の研究の一環で、 (『成城大学短期大学部紀要』 35。 ける「不審」―大蔵虎明本・虎寛本狂言との距離を計る―」 どの注記を取り上げ、 大学国文研究』 に近いものの虎寛本の様相に傾きつつある点もあるとする。 ·大蔵虎明の狂言用語意識―本文注記の分析から―」 (『香川 後に国語学的研究。小林千草 違いによる差異にも注意が払われている。 28 9月)は、 虎明が詞章のさまざまな点で用語 天理本におけるその様相が虎明本 これらは台本・ 虎明本の行間 3月)は、 「天理本 「不審」の語に関 【狂言六義』 ・上欄 作品研究にも 小林賢次 曲 末な の お

> バナラヌ」が主流となるとし、 は「イデ(ハ)カナハヌ」が主流であったが、 重否定形式によって表現される当為表現について、虎明本で 弘徳「狂言台本における二重否定の当為表現―大蔵流虎明 と「の」が共存する例について、その使い分けを見る。 ら―仮想的追体験」(『国文学』3月)は、『狂言記』 平家物語』と虎明本を比較することで論ずる。同「狂言記か て格助詞「ガ」が活動領域をひろげていったことを『天草版 狂言』との比較―」『文学・語学』 活動領域拡大の様相― 版本狂言記を中心に―」(『語文研究』95。 田 「室町末期から江戸初期における主格表示 『天草版平家物語』と『大蔵虎明本 時代による変遷を見る。 175 2月)は、 ―~テアレバは状 狂言記では 6月)は、二 主節にお に「が 福嶋健 動 本 「ガ 疕 詞

本・

バ」に状態表現として解釈できない例があることについて虎 件表現「~テアレバ」「~テアラバ」の使い分け、「~テア 態表現として解釈できるか―」 伸「中世末期日本語の~テアルの条件表現· 究』8)は、否定疑問文による行為要求表現として 「~マイカ」から「~ヌカ/ナイカ」へ―」(『筑波日 マイカ」から「動詞+ヌカ/ナイカ」に変化するとする中で 動詞+マイカ」が一般的な例として虎明本を引く。 永田里美「否定疑問文による行為要求表現の史的変 (同上)は、 「~テアル

# 外国語による能研究

nell University, 2003. xxvi, 332 p.(メイ・J・スメサースト、 nameshi: A Flower Viewed from Many Directions. Cornell ら眺められる花』) クリスティナ・ラフィン編、『能〈女郎花〉――様々な角度か East Asia series 118. New York: East Asia Program, Cor-Smethrust, Mae J., and Christina Laffin, eds. The Noh Omi-

ティーブン・ブラウン Steven T. Brown、スーザン・ブレイ 郎花〉をめぐる国際学会での討議を経て、参加者が新たに書 が能研究にもたらし得る豊かな実りを読者に印象付ける。 上げた多岐に渡る論文が寄せられている。国際的アプローチ 関わり、その宗教的意義や作者、演出、時代背景などを取り 者・実践者から、〈女郎花〉の翻訳、 久(執筆順)といった国籍もまた研究アプローチも異なる研究 天野文雄、竹本幹夫、モニカ・ベーテ Monica Bethe、鵜沢 アーサー・ソーンヒル Arthur H. Thornhill III、西野春雄、 William R. LaFleur、スーザン・マチソフ Susan Matisoff Carolyn A. Morley、脇田晴子、ウィリアム・ラフレール クリー・クライン Susan Blakeley Klein、キャロル・モーリ き下ろした論文をまとめたもの。メイ・スメサースト、ス 一九九七年十月にピッツバーグ大学で開催された、 他作品や他ジャンルとの 能〈女

ス著「中世日本の歌学と演劇理論における拉鬼体」) ica 58, no. 3(Autumn 2003): 317-46.(ポール・S・アトキン Japanese Poetic and Dramatic Theory." Monumenta Nippon Atkins, Paul S. "The Demon-Quelling Style in Medieval

guage and Literature 37, no. 2(October 2003): 104-16.(D Borgen, Robert. "Stone Bridge (Shakkyō)." Japanese Lan-

春禅竹の能楽理論において発展していく様を詳しく論じる。

定家の和歌理論にはじまった拉鬼体が、連歌理論および金

バート・ボーゲン著「石橋」)

する。 Renondeau によるものが France Asie 171に収録されている)。 品における「中国風」な要素(漢詩の引用、獅子の舞)を指摘 の生涯と彼にまつわる諸伝説について詳しく記し、さらに作 翻訳の冒頭に付した注においては、本作品のワキである寂照 〈石橋〉の始めての英訳(仏訳は、一九六二年に Gaston

る中世日本の王権と子役」) 2003): 411-25.(トマス・ヘヤー著「天皇の能装束 Drama." Cahiers d'Extrême-Asie (Paris; Kyoto) 13 (2002-Japanese Kingship and the Role of the Child Hare, Thomas. "The Emperor's Noh Clothes: Medieval 能〈国栖〉の劇構造、ジャンル、

子方の使用や装束を含めた

な政治的メッセージを読み解く。各役の造形などの仔細な分析を通じて、作品が発する多義的

Min, Tian. "Chinese Nuo and Japanese Noh: Nuo's Role in the Origination and Formation of Noh." Comparative Drama (Kalamanzoo, MI) 37, nos. 3-4 (Fall-Winter 2003-2004): 343-60.(ティアン・ミン著「中国の儺と日本の能――能の発生と形成において儺が果たした役割」)

される仮面を比較し、両者の類似性を明らかにする。を論じる。また、中国の儺儀と日本の追儺や能において使用日本の仏教儀式、ひいては翁および能劇の形成に与えた影響

中国における儺の歴史を詳しく紹介するとともに、

それが

Rath, Eric C. "Remembering Zeami: The Kanze School and Its Patriarch." Asian Theatre Journal 20, no. 2(Autumn 2003): 191-208.(エリック・C・ラス著「世阿弥を記憶にとどめること――観世流とその始祖」)

声が果たした役割が、明らかにされる。 声が果たした役割が、明らかにされる。 きたのかを丁寧に追う。それによって、三者各々の能改革にきたのかを丁寧に追う。それによって、三者各々の能改革にきたのかを丁寧に追う。それによって、三者各々の能改革に作において、世阿弥と自分とのかかわりをいかに位置づけて作において、世阿弥と自分とのかかわりをいかに位置づけて十五世観世大夫元章、シテ方観世流第二十四世宗家左近、十五世観世大夫元章、シテ方観世流第二十四世宗家左近、

Ruperti, Bonaventura. "La letteratura teatrale giapponese in Italia ovvero il teatro giapponese in Italia e il teatro italiano in Giappone." Tamburelo, Adolfo, ed. *Italia-Giappone*. 450 anni, Roma: Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente; Napoli: Universita degli Studi di Napoli 'L'Orientale', 2003, 573-88. (ボナヴェントゥラ・ルペルティ著「イタリアにおける日本演劇、あるいはイタリアの日本演劇と日本のイタリア 演劇」)

ページを割いている。劇の上演・翻訳・研究の歴史に詳しく、能の受容には多くの劇の上演・翻訳・研究の歴史に詳しく、能の受容には多くの劇面から概観する。とりわけ、イタリアにおける日本古典演戦前から戦中、戦後を経て現在にいたる日伊の交流を、演

Thornton, Peter. "Monomane, Yūgen, and Gender in *Izuts*』 and *Sotoba Komachi*." *Asian Theatre Journal* 20, no. 2 (Autumn 2003): 218-25.(ピーター・ソーントン著「〈井筒〉 と〈卒塔婆小町〉における物真似・幽玄・ジェンダー」)

ターの男性への移り舞を分析する。 援用しつつ、〈井筒〉と〈卒塔婆小町〉における、女性キャラク援コにつつ、〈井筒〉と〈卒塔婆小町〉における、女性キャラク

### ◎書評

Nō e o Ocident. São Paulo: Annablume Editora, 2000, 136 p.

(『能と西洋』、原文ポルトガル語)に対するエヴァン・ダー (『能と西洋』、原文ポルトガル語)に対するエヴァン・ダー こに基盤を置いてきたと本書は論じる。

# 【付・外国語による能研究(二〇〇二年)】

のを、以下に簡単に紹介する。○一年の論文を紹介)から始まった試みである。その際に取○一年の論文を紹介)から始まった試みである。その際に取外国語論文の紹介は『能楽研究』前号(二○○○年、二○

### **)単行本**

\*Terasaki, Etsuko. Figures of Desire: Wordplay, Spirit Possession, Fantasy, Madness, and Mourning in Japanese Noh Plays. Ann Arbor: The Center for Japanese Studies, The University of Michigan, 2002, xvi, 329 p.(エツコ・テラサキ 第「欲望の形容——能における言葉遊び・憑物・幻想・狂気・哀悼」)

edy Classroom." *The Classical Journal* 98, no. 2(December 2002): 189-98.(ティモシー・ムーア著「古代喜劇の授業教材

\*Noy, Kinneret. "Creating a Movement Space: The Passageway in Noh and Greek Theatres." New Theatre Quarterly (Cambridge, England) 18, no. 2(May 2002): 176-85.(キルット・ノイ著「動作空間の形成――能とギリシャ劇における通路」)

\*Serper, Zvika. "Between Two Worlds: The Dybbuk and the Japanese Noh and Kabuki Ghost Plays." Comparative Literature (Eugene, OR) 35, nos. 3-4 (Fall-Winter 2001-2002): 345-76.(ツヴィカ・サーパー著「二つの世界の狭間で――ディバック(訳注:ユダヤ伝説における死者の霊)と能・歌舞でイバック(歌注:ユダヤ伝説における死者の霊)と

\*Umali, Amparo Adelina. C., III. "Yuko Yuasa's Biblical Noh Play, Hannya Miriam." In Across Time and Gender: Reading and Writing Women's Texts. Conference Proceedings. University of Alberta, edited by Janice Brown and Sonya Arntzen, 284-88. Edmonton: Department of East Asian Studies, University of Alberta, 2002.(アンパロ・アデリーナ・ウマリ著「湯浅裕子の聖書能(はんにゃミリアム)」)

#### **公論文**

\*Moore, Timothy. "Japanese Kyōgen in the Ancient Com-